途上国で幼児教育を支援するために

開発途上国では、初等教育がある程度まで普及してくると、就学前教育に注目する傾向があります。それまで幼児教育は、恵まれた層の子どもたちのためのものでしたが、最近では庶民層・貧困層の子どもたちのための就学前教育施設の増加や向上が見られるようになりました。その背景として、全世界的な幼児教育への関心と、発展途上国として切実な課題である識字教育へのニーズがあるのではないかと考えられます。

2000 年にセネガルで開催された世界教育フォーラムでは、ダカール行動枠組み（「すべての人に教育を：EFA:Education for all」の達成を目指す枠組み）の具体的目標のひとつに「就学前教育の拡大・改善」が提示されました。途上国の就学前教育支援への世界的な潮流が示され、先進国と途上国が共に行動を起こすことが約束されたのです。途上国に対する日本の幼児教育支援は、従来から少しずつ行われてきてはいましたが、今後ますます求められてくると考えられます。

先に述べたように、途上国では、幼児教育をより多くの子どもたちのためのものにする努力や、内容・方法を充実させようとする必要感が高まっています。それに応えて、幼児教育を主軸とする日本の支援団体の活動が活発化し、また、青年海外協力隊などに対して、途上国からの幼児教育支援要請も年々増加しています。

第 1 部、第 2 部では、日本の保育内容を理論的・実践的な面から紹介し、それらの情報をどのように読みとって、実際の保育現場で利用したらよいかを述べています。ここでは、支援者としての配慮や態度、幼児教育支援の内容について、これまでの支援経験（青年海外協力隊、その他の支援団体による経験）を述べ、現時点での情報として提示していきます。

1　幼児教育支援者としての態度および配慮

- 途上国の幼児教育事情を受けとめ、柔軟に対応しながら理解していく。
- 支援者自身は、自らの意志で支援に来たことを忘れない。
- その国の教育方針や社会情勢を理解し、教育観・育児観を尊重する。
- 日本の教育観・指導方法と比較して批判しない。お互いの考えを出し合えるようにする。
- 日本のやり方を押しつけない。相手のやり方を見て、その力を生かし、自主性を育てる。
- 相手の自主性を待ちすぎて何も示さないと、頼りないと思われる。求められたら効果的な内容を紹介していく。
- 実際に見たり、聞いたり、身体を動かしたりしながら、具体的に分かるような内容や、実際に役立つ活動から始める。
- 支援者の保育経験を生かしながら、現地の状況や考え方に見合った保育方法を展開する。
- その国の子どもにとって適切な指導方法を考案し、相手の共感を得ながら、意義を伝える。

2 幼児教育支援の中で行ってきた内容

- 途上国の人づくり：実際に保育をしてみせ、将来をになう健全な幼児を育成する。
- 現場教師の成長援助：共に実践し、指導法や技術を伝える。
- 地域の巡回指導：現場の保育に対しての助言・指導や、地域の連携・協力を支援する。
- 講習会の開催：保育内容（教材づくり、保育実技、乳幼児の指導法など）や、保健衛生、栄養、安全、生活改善、家庭での子育てなどを伝える。
- 施設・設備への援助：園舎、遊具、保健施設などの設置、改善、管理について助言し、協力する。
- 途上国の指導者との協力・連携：現職教師の研修・講習、あるいは展示会に参加する。
- 教師の養成：養成校の講師として、教師の養成や保育研究を支援する。
- 幼稚園・保育所の運営：保護者と連携しながら協力していくことを助言し、支援する。
- 地域、行政関係との連携、協力：地域の文化事業や行事に参加するなどして、信頼関係を築くことで、幼児教育への理解を深めていく。
- 来日研修：途上国の指導者が、日本に来て研修することを援助する。
- 途上国支援の理解と支援体制の確立：日本国内の幼稚園関係者、支援者と連絡し、協力しながら、ネットワークを作っていく。

3 途上国の幼児教育事情と支援の課題

途上国の幼児教育は、その歴史が浅く、「これから」という点が多くあるのが実情です。その中でも特に支援を必要とする 3 点を挙げます。

- 一般的に保育者の養成校がほとんどない、あるいは、幼児教育の経験をもつ指導者が少ない。このため、教師の中には十分な講習を受けられないまま、保育の現場に立つ場合が多い。教師養成校への講師派遣や、養成プログラムの充実に向けての支援が望まれる。
- 幼児の発達に対する知識や、適切な指導法についての理解がない場合が多い。小学校と同様の一斉授業の形態であったり、教師ひとりに対して子どもが多すぎたり、教師が一方的に主導していったりするなど、改善すべき点がある。園舎・施設・設備の改善や、教材不足の解消、幼児の発達に合った指導方法の開発にむけて、途上国の人々と共に努力していくことが重要である。
- 多くの途上国では成人識字率が低いことから、「読む・書く・数える」という幼児期の識字が非常に重視されている。このような課題をふまえて、日本からの幼児教育支援は、「識字教育」に対する指導法や教材開発について、途上国の人々と協力して取り組むことが必要である。

4 保育内容および指導法の実際

途上国の子どもや教師に対してどのような支援ができるのか、これまでの実践例から紹介します。日本の幼児教育の考え方や工夫が生かされている様子や、途上国の教師たちが真剣に幼児教育を吸収し、意欲的に成長していく姿、その国の幼児教育の改善を考えている姿などを、読み取ることができるのではないでしょうか。

(1) 指導法・指導形態

途上国では、幼児期に即した指導法ということについてあまり考えられず、授業の形態で厳しく教え込むという方法が多く用いられています。幼児期にふさわしい指導方法、おもしろく楽しい教え方を、現地の教師に提示することが必要だと考えられます。子どもが生き生きと興味をもって学ぶ姿をとらえて、教師の理解に訴えます。教師自身も工夫を重ね、意欲をもてるように支援していきます。

教師が黒板に英語や数字、計算を書き、それを子どもに写し取らせたり、一斉に唱和させたりするという指導方法が、当たり前に行われています。

半円の机を取り入れて、教師と幼児が向かい合えるようにし、一人一人の様子を見ながら指導するようにしました。

机の購入費は、幼児教育を支援する日本の団体から寄贈を受けました。

教師 1 人で、子ども 10 名前後を集め教えている、寺子屋型幼稚園の例です。

机の並べ方を工夫して、コの字型にしました。教師が一人一人の子どもと向き合って、ていねいに指導できるようになりました。

黒板の文字と太い棒（教示用）が印象的です。

いつも大声で教師が指導しているところでは、子どもは権威には従いますが、集中する態度が育つことにはつながらないようです。

マットに集め、言葉遊び、数遊び、なぞなぞなどをしながら、教師の話を聞くことも学んでいきます。

朝涼しいうちに木陰を利用して、絵本や紙芝居の読み聞かせを行うことを、現地の教師に提案しました。

その後、手作り絵本を作ったり、読み聞かせをしたりするようにもなりました。

(2)　園庭・遊具・遊び

古タイヤ遊具は、どの途上国でも活用されています。

芝生の園庭に埋め込んであります。
庭は、はだしでのびのびと遊べるように、教師や保護者が協力して整備しました。

しっかりした砂場がありますが、今まではあまり使われていませんでした。

最近になって、子ども同士で水を使って遊ぶ姿も見られるようになりました。

砂遊びがもっと活発に行われることを期待しています。

園庭は土漠（土の荒原）のため、晴れれば土ぼこり、降ればどろんこの海です。

ブロック積みの園舎は、窓と扉を小さくして暑熱を防いであります。

古タイヤで作った遊具やすべり台、ブランコなどがそろっています。

タイヤを支えている綱がすり切れているのが心配です。

園舎は、開口部が大きく、扉なしで海風が吹き抜けるようにしています。
園庭に木陰もあります。
古タイヤブランコは、支柱や網が細く要注意です。
手前のしっかりしたすべり台は、日本からの寄贈品です。

この園では、冬は零下 30 度にもなります。

夏はできるだけ裸で日光にあたり、健康の増進に努めています。

子どもたちの大好きなシーソーです。

自然に声をかけ合い、触れ合いながら遊んでいます。

(3)　自然物を生かした遊具・遊び

木が低い位置から枝分かれしていて、木登りやぶら下がるのに好適です。

いつも園庭にある緑の木陰は、子どもたちが自然に集まる遊び場となっています。

土を掘り下げてタイヤを置き、1 メートル程の苗木を植えました。

高温多湿の国では、2～3 年で根を張り、しっかりした木になります。

園庭を計画的に作っているよい例です。

親しみやすい豊かな自然が身近にあります。

草花を使って遊んでいます。
林の向こうには池があり、泳いだり、魚をとったりして遊びます。

幼稚園の庭で、自然にどろ遊びが始まりました。

花や木の葉も使って遊びます。
教師も子どもと一緒になって遊んでいます。

この教師は、日本で約 1 年の研修をしてきた人です。

日本の支援者が、現地に多くある木を使って、あずまやと丸太渡りの遊具を作りました。

とてもよい感じに出来上がりましたが、防腐剤を施さなかったため、わずか 2 年で腐食してしまいました。

この国の人たちは、金属、コンクリートで遊具を作るようです。
気候の変化が激しい国では、その方が理にかなっています。

実を取りのぞいたココナツの殻は、いろいろなものに使われます。

運動会では、ココナツで作ったぽっくりをはいて競争しました。

(4)　文字・数字の指導教材

書く、読む、数えるなどは、幼児期の識字教育として求められています。しかし、実態は黒板の文字を機械的に写させたり、計算をさせたり、ドリルを使ったりするだけで、それ以上の工夫がされていません。

幼児教育支援にあたっては、幼児にふさわしい指導法を積極的に提示することが必要です。英語と現地語の文字表、文字や単語のカルタなどの教材作成も必要です。現地の教師の知恵や絵を生かした教材づくりをサポートすることが大切です。

数字と、実数（生き物の絵をその数だけ貼ってある）、数の読み方、数カード、絵本、パズルなどを、子どもの目につくところに置いてあります。

巡回指導に行った支援者が、歌いながら文字や数を学ぶ方法を、子どもの前で実演してみせています。

巡回指導は、「幼児にふさわしい指導法」を、現地の教師に伝えるのに効果的です。

木片を利用してドミノにして遊びます。

現地の教師が、地域からいろいろな材料を探してきて、教材づくりをするようになりました。

〇△□の形を並べて、形を認識していきます。

紙がないので、床の上でしています。

子どもたちが遊べるように、輪投げや数ゲームなどが用意されています。

支援者と、現地の教師の合作です。

数字を探して釣るゲームで遊びながら、数字に親しんでいきます。

途上国では、ようやく自国の作家や画家による絵本が刊行され始めました。

しかし、幼稚園や家庭ではほとんど購入できません。

そこで、日本の支援団体が「絵本箱」を作り、巡回貸出しをしています。

こうして自分の国で作った絵本が、多くの幼稚園や家庭で子どもたちに読まれるようになりました。

(5) 造形活動

途上国では折り紙を教えてほしいと頼まれることがあります。日本の折り紙への関心を受けとめ、相手と共に手を動かしながら会話をすることで、現地の人の親しみをつくることはよいことです。しかし、折り紙など日本からの教材は、十分に使うことはできません。そこで、材料は現地で手に入りやすいものを使うことが原則です。材料の見つけ方、集め方、買い方なども現地の教師と考え、アイデアをもらいながら準備することが大切です。日本の製作は、紹介・ヒントに過ぎません。その国の子どもにふさわしいものを考えたり、作ったりする教師を育てることが大切なのです。

クレヨン・絵の具が手に入りにくい国では、身近な草花を煮出してローカルペイントを作りました。

筆もココナツを使った手作りです。

教師たちは、自分から廃材、自然物などの材料を見つけ、種類別に整理するための工夫をしました。

整理した材料の中から適当なものを見つけて、教師も子どもたちもおもちゃを手作りするようになりました。

古新聞紙は、家庭では生活用品として大切にされています。

支援者は、自分の新聞紙を教材として提供しました。

教師にとっても、子どもにとっても、初めてのお店屋ごっこの体験です。

お店の品物や、財布を作り、お金は木の葉です。

ドラムは山羊皮をかぶせてあります。

アフリカの人達のリズム感は抜群です。

ひょうたんや空き缶を使って楽器を作りました。

作った楽器と、昔からの楽器を合わせて、ますます踊りが盛り上がるようになりました。

(6)　教師のための講習会

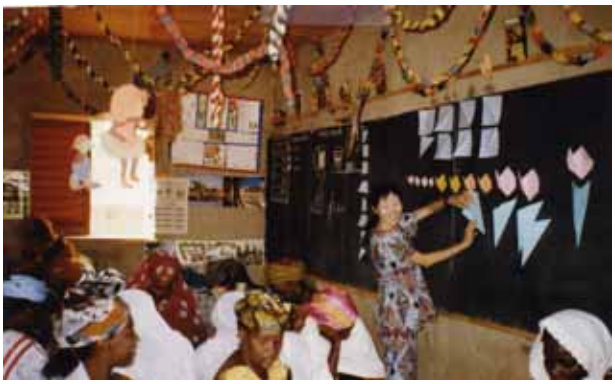
教師のための講習会を行う際には、現地の教師が求めているものは何か、また必要なものは何かを考えて、テーマや内容を決定します。まずは、おもしろくなければなりません。そして、現地の教師や地域の人々が参加し、一緒に活動できるようなセミナーを考えます。

観光が主要な産業となっている国では、小さいうちから英語は必要な言葉です。

英語の手遊び歌の文字や、単語を自由に変えながら楽しく覚えます。

「日案や週案の作り方」の講習会です。

「頭の中を明るくして考えましょう」と言って、電球のお面をつけ、リラックスして学んでいます。



紙が手に入りにくい国でしたが、折り紙を教えてほしいという熱烈な要望に応えて取り組みました。
ヒントとして、折り紙に代わる材料でも出来ることを伝えました。

トレーニング・センターでの実技講習です。

絵を描くことよりも、材料集めが楽しい貼り絵に人気があったようです。

工夫したり、細かく手をかけたりして成功感が味わえるという声が聞かれました。

子どものダンス公開保育です。

子どもたちが楽しく踊る様子を見て、子どもに分かる歌詞や、メリハリのあるリズムを取り入れることの大切さが伝わったようです。

もちろん、アラブの踊りも大切に伝えています。

新聞紙を使って帽子（かぶと）を作っています。

思いがけず身近なところから見つけた材料を使って遊ぶおもしろさを体験しました。

教材に対する教師たちの考え方も少しずつ変化し、広がっていきます。

みんなで子どものための運動を学んでいます。

童心に返って、赤ちゃんのようにハイハイをしたり、動物になったりしました。

初めての講習会で大爆笑です。

いくつかの園を巡回して、保育の指導や合同の勉強会、地域の保護者との交流などを行いました。

村の広場で、保健・栄養の啓発のための劇をしています。

途上国の指導者たちの来日研修です。

指導者たちは、日本の幼児教育について高い関心をもち、保育現場の見学を強く希望しています。

子ども達と一緒に遊びながら、実際に保育を体験しています。

(7)　園の生活

誕生会です。

お面をつけて雰囲気を盛り上げながら、自分の名前と年齢を言っていきます。

まだ言えないこどもは、年齢を指で示しています。

当番活動です。

生活の中で数を考えるよい機会です。

人数を数えたり、食器やスプーンの数を考えたり、実際に身をもって数にふれるようにします。

以前は、数字を書いたり、計算したりすることだけが学習とされていました。

園長以下、教師全員で「大きなかぶ」の劇を子どもたちに見せました。

日本の教師が支援に入ったことで、園の協力体制にも、さまざまな変化がもたらされたのです。